

前回、フランスにおける天理教の布教で信者獲得に奔走するリスクについて書いた。天理教の場合も、他宗教と同じように布教には信者数拡大が視点の中心にあったと思う。それはもちろん信者を増やすことで、天理教の理想とする陽気ぐらし世界に近づくという期待がこもっている。しかし、そういう考え方はフランスではもはや理解されにくいだろうと述べた。

次にあげる試算はある教会長に聞いた話だが、仮に1日に千人のようぼく、つまり「さづけ」という病氣治癒の祈りを捧げることができる信者を生み出した場合どうなるか。1カ月で約3万人、1年で約36万人のようぼくが誕生する。100年で3,600万人となる。いろいろな意味で示唆に富んでいる。ようぼくは一般の信者よりも進んだ実践を行うわけだから、実際に3,600万のようぼくができる背景には、更に多くの信者が生まれているはずだ。100年で信者数が1億になることもあり得る。しかしながら、まず毎日千人のようぼく誕生は現状では考えにくいし、また100年のスパンだと亡くなってしまいう方も多いだろう。世界人口80億と言われる現代において、ようぼく・信者の増加に主眼を置いた布教戦略は、フランス社会からも厳しい目で見られる上に、計算できる数字と影響力が落ち続けている宗教全体の趨勢から考えて労力に対する効率が悪い。

もちろん効率は精神世界ではあまり気にしなくてもいいが、それは正しい道を進んでいる場合に限る。信者数獲得や組織の肥大化は天理教の本来の道ではない。あくまで陽気ぐらし世界建設が目的であり、そのために純粹に人だすけの手段たる「さづけ」を取り次げる信者を養成することが望まれている。それは時間もかかるし、たしかに非効率的だが、悪いことでもないだろう。

フランス人が天理教を信仰する難しさは、想像に難くないだろう。家族親類に信者がいないか極端に少ない、教会や信者コミュニティが近くに存在しない、天理教についての情報や知識が乏しい、日本語が話せない、日本的な伝統や文化に基づく作法や風習が分からない、育った環境とのギャップが大きいといった障壁によって、天理教信仰のハードルは高くなっている。いま熱心に信仰しているフランス人信者は、もちろん導く布教師のなみなみならぬ努力があることは言うまでもないが、日本人より難しい環境にありながら困難を乗り越えて信仰の喜びをつかんだ数少ない人たちだと言える。現在の状況で天理教信仰を維持できるフランス人は多くはないだろう。

だが逆に、フランスから見てのエキゾチックな感覚や日本への憧れが信仰の強い動機になる場合もある。自分たちの文化では知りえなかった新しい気付きもある。また、近くの布教所や友人宅で月次祭などに通い、天理教の教えを多少なりとも知ってから、ヨーロッパ出張所などのより大きなセンターに行く。そこでまたいろいろな活動を通して天理教の教えを深めるといふ自然な流れができやすい。

ライシテのポイントの一つは宗教選択の自由である。これは日本でもそうであろうが、個人の意思表示が日本より強く明確に示されるフランスにおけるその意味合いは大きい。フランスでは、信者数増加こそ布教であるという固定観念に縛られな

れば、別席やようぼくになる目的を信仰順序の後の方に持っていきやすい。つまり、別席を選びたい、ようぼくになりたいと思うまでの準備段階に時間をかけられる。

そこで問題になるのが、天理教の説明の仕方である。『天理教教典』、『稿本天理教祖伝』、『みかぐらうた』をはじめ、天理教解説書もいくつかフランス語に翻訳されている。フランス人による著作もある。東洋思想に造詣が深く行間を読める人や宗教的素養が高い人であれば、『天理教教典』や「おふでさき」の訳本を読んだだけで教えの真髄をつかめるかもしれない。しかし、それらを読んでも天理教についてあまり理解できないフランス人は多いだろう。それは翻訳に問題があるというよりも（翻訳に課題もあるだろうがそこには立ち入らない）、現行の刊行物だけでは天理教の教えを正確に伝えるのに限界があるということである。

翻訳刊行物が多くはないフランス語の場合、実際の信仰者から生の説明や実践を見聞きすることが特に大切になるが、それはつまり、布教に携わる者の表現力の重要度が高いということだ。これはヨーロッパ共通言語枠のA1、A2といった語学レベルの話ではない。正確な文法で流暢に話す人でも、宗教的情緒が足りなければ心に響く信仰表現は紡げないだろう。語学力だけが独り歩きする説明にならないためには、ライシテの理解が必ず必要になって来るのである。

4月号でフランスのMiviludes委員会によるカルトの定義を紹介したが、それはカルトの逸脱行為を定義するものであり、カルト教団をリストアップするための定義ではない。人権を侵害する違法行為が多様な形態を持つようになった現代、危険なカルト教団をリストアップしてもアップデートが追いつかないし、信仰の自由を保障する上で偏見を持たせるリストはライシテの原則にも合わない。社会や個人を危険にさらす行為は宗教にとどまらず、現代生活のさまざまな場面に存在する。同委員会による報告書では、医療行為、食生活、瞑想、ヨガ、パーソナルコーチング、インターネットの啓蒙ビデオなどを通じて人々の生活を脅かす問題が紹介されている。危険思想かどうかもあるが、それ以上に行動や活動の違法性が問題となるだけに、使う表現には注意が必要となってくる。どんな情報をどうやって伝え、それがどのように受け取られるのか。独りよがりではなく、相手がどう受け取るかを客観的に判断することが、布教の上でもっとも注意すべき点であろう。

自分のフランス語表現や行動がどのように伝わっているかを、ライシテを意識に留めた上で自覚できることがフランス布教の要点になることは間違いはないだろう。

[参照]

「対カルト運動の省庁間共闘警戒委員会サイト」のQAページ。
<https://www.miviludes.interieur.gouv.fr/faq> (2023年8月27日参照)。

対カルト運動の省庁間共闘警戒委員会(MIVILUDES)年次報告書「2021年年次報告書(2022年11月3日)」、「2018年から2020年の年次報告書(2021年7月22日)」。